

給食を通して考えたこと
 一年三組 多田 瑞希
 現在、日本では、私達の中学校も同じよう
 に、小中学校では給食が食べられてい
 う。『食』というものは私達にとっ
 て生きていくうえで大切であり、身
 近だ。私のクラスでは、給食委員
 が声をかけて、そのかけ声に復唱す
 る形で『いただきます』と言いま
 す。それが全員の心が手に取る。い
 いただきます。の一言が小さい人
 もいれば、まったく口に表さない
 人も中には数人いる。しかし、ク
 ラスに給食がさらい、という子は
 いないだろう。苦手を食べ物
 はあっても、誰もがいしそ
 うに給食を口にしている。これが
 私のクラスの『あたりまえ』の給
 食の風景だ。だが、日本ではあ
 たりまえの給食（食）は、今や世
 界では大きな問題となっている。
 総合の授業でSDGsについて学
 ぶ時間があつた。十七の目標につ
 いてそれぞれの解説の動画を見
 たことがある。その中

20 x 20

2
 が私が特に興味を持ったのは、
 ゴール2の飢餓をゼロにだ。動画では
 世界で食料不安をかえる人の割合
 は全体で約三割を上回っている。
 しかもそれは年々増加を
 している。世界の飢餓人口は七億
 二千万人にも達している。な
 ど、主に紛争下の国や経済的に貧
 しい国で食料問題は深刻化して
 あり、このままでは近いうちには
 世界的な食糧危機に
 おちいかねない、と飢餓について
 の問題が挙げられていた。そうい
 った。そういつた国に限らず世界
 の食糧事情を考えると、日本は平
 和で健康的だと思つた。毎日学校
 に行けばまるであたりまえのこと
 であるかのように当然と配ら
 れる給食がこころにもありがた
 いことだとは知らなかつた。好
 き嫌いはあつか、満足に物を食
 べられない人達もいることを知
 った。給食制度が当たり前
 の日本で飢餓について考えさせ
 られる機会はなかつた。だ
 らうと思つた。では、『飢餓を
 ゼロに』というこの目標の
 実現について、私達には何か
 できることがあるだろうか。少し
 考え

20 x 20

てみなが、できることは少ないと感じた。世
 界の様々な人達が考え、国同士で協力して、
 何日もの話し合いを経て国連で掲げられた目
 標がSDGsだ。ただの中学生の私達がその
 目標の達成のために今すぐにもできること
 は非常に限られている。しかし、そのいくつ
 かの自分で手が届くことができるところ本
 当に目標は達成できると感じる。私はずはこ
 れならできるといいう取り組みは、個人の意
 識を変えることだと思ふ。ただ義務的につ
 いては、ただきまず。つごちそうさまを繰り返すだ
 けでなく、安全な食を中心して食べることの
 できる日本の恵まれた社会に感謝して、心を
 込めてついでたきまず。つごちそうさま、小こ
 いことだが私達ができる取り組みだと思ふ。
 つ自分は幸せだ。つという意識を持つて、ま
 ずは食に感謝する意識を持つてこそが大事
 なのだ。つさきほども述べた通り、つ食とい
 うものは私達にとつて生きるうえで大切で、
 身近なものだ。学校給食とは平和なからこそ

実現させている。こねがこねからも続いてほ
 しい、と心から強くそう感じる。この作文を
 通じて、普段何気なく食べていた給食に対し
 改めて感謝という大事なものを感ずることが
 できた。こねがこねからも、ついでたきまずとい
 う一言は食を提供されていふという感謝の気
 持ちを込めて言いたいと思ふ。